

ひとつの思い出——・鹿子木 昇

(前アジア経済研究所所長)

古い話で恐縮だが、もうかれこれ三十年前、アフリカ西海岸の国リベリアの首都モンロビアで、国際ゴム会議の総会が開催され、日本政府代表として、出席したときのことである。当時、国際ゴム会議の総会は、その事務局のあるロンドンで、毎年開かれていたが、ゴムの消費国、生産国廻り持ちで開こうということになり、アメリカのファイア・ストーン社がゴム園を経営しているリベリアで開くことになったのである。大きな国際会議を開いたことのない国だけに、会場やホテルの建設を急ピッチで進めたが、間に合わず、私達代表団は、会期中、一軒の家を借り切ってそこで寝泊りした。

まだ在留日本人は、殆んどいない頃であったが、ある日、偶然、一人の日本人青年に出あった。この人は、リベリアの青年の体育指導に来ていて、毎日熱心に、走り幅跳びや、走り高跳びを教えていた。気候も悪く、食糧事情も必ずしもよくない所で、不自由な生活に堪えながら、献身的に指導活動に奉仕している姿には、頭の下る思いがした。その人の話によると、リベリア人は、脚腰のバネが強く、すばらしい跳躍力を持っている人がいるので、素質のある人を見出し、正しい指導の下に練習につとめるならば、立派な国際的選手が育つことは間違いないと断言していた。

問題は、いかにして、すぐれた素質のある人を見出すかということで、人材を発掘する全国的な組織作りから始めなければならないということであった。これは、その指導者一人の力をもってしては、到底なし得ることではなく、国がその必要を認め、その方法を講ずることによって、はじめて、なし得ることである。

同じアフリカのエチオピア人が、オリンピックのマラソン競技で、優秀な成績をおさめているが、リベリア人がオリンピックに出場して、跳躍競技で活躍しているかどうか、寡聞にして、知らない。